Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

実習観察園を活用した「幼児環境指導法」の実践例：指導案作成と体験型学習の融合による保育者養成教育

近江戸，伸子
大野，朋子

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,特別:43-46

(Issue Date)
2016-06-21

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041049

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041049

KOBE UNIVERSITY

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要 特別号 2016
Bulletin of Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, Special Issue 2016

実習観察園を活用した「幼児環境指導法」の実践例 ～指導案作成と体験型学習の融合による保育者養成教育～

Case Studies on Merging Active Learning and Curriculum Development in Early Childhood Teacher Training: Using Environmental Education and Research Garden in the education of ECE field of contents "Environment"

近江戸　伸子*　大野　朋子**
Nobuko OHMIDO*　Tomoko OHNO**

要約：平成20年文部科学省発行の幼稚園教育要領のねらいとする領域の環境教育に基づいて、1、野菜・花栽培、2、緑化設計と制作、3．田植え・稲刈り、4、草あそびの習得項目を設け、専門的な知識をもった、総合的な体験型の環境教育に関する提案をおこなう。4項目について、指導案を作成指導し、実習観察園での体験型の学習による保育者養成を実践している。期待される教育効果としては、野菜栽培を通して、日常から食べている食物や農業に対する興味を幼児が感じる事が期待される。身近な環境にかかわり、発見を楽しみながら、生活に取り入れようとするという点では、植物の成長を観察することを通じて、幼児の新たな自然の気づきとふれあいに期待できる。校内の花壇や壁面の緑化環境を整備する実習においては、エコロジー感覚を幼児教育に取り入れることができる。また、日本の古くから伝わる菓子や玩具が、植物と密接に係わり合いがあることが理解でき、食育も含む季節感のある学びとなり、最終的に、幼児が身の回りの自然に愛着を感じるようになると期待される。体験型学習により、総合的に植物の成り立ちから日本の伝統行事、食生活に興味を持ち、情緒豊かな生活を楽しむ視点に立った保育者の教育が可能となる。

1．はじめに

平成20年文部科学省発行の幼稚園教育要領[1]によると、そのねらいとする領域として、健康、人間関係、環境、言葉、表現が提示されている。環境教育に関しては、植物を栽培し、植物で遊び、植物を食することによって、命の重要性にふれ、環境を創造する喜びを体得することが可能となる。また、このような教育は、環境のみにとどまらず、健康、人間関係、言葉、表現という領域を総合的に考察することが可能になると考える。近年、日本の従来の生活経験、季節感、自然体験が乏しいまま教諭や保育士となる若手教員が増えており、虫嫌い、植物等をさわれないといった問題が現場から寄せられている。それを補うため実際に体を動かし、アクティブ・ラーニングを体験する機会を設け、その環境指導法を実践する実習を行った。そこで本報告では、「幼児環境指導法」で実践してきた体験型の幼稚園教諭育成のための環境教育の指導方法について、その実践例を述べる。

2．幼稚園教育要領にもとづく環境指導法

幼稚園教育要領[1]にもとづくと、環境教育について、次のねらいを計画的に行うことが求められている。(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。(2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

植物による環境教育指導を想定し、以下のような授業の項目を立て、実践している。通常の保育者育成の場合は、座学が多いとされる。そこで、本学では、人的・物的・空間的リソースを活用して、発達科学部付属実習観察園において実践的な授業「幼児環境指導法」を行っている。これまでの実績としては、平成7年以来、毎年、約20-28名が履修している。

また、下記に述べるそれぞれの項目について、指導案を提出させ、大学生自らが指導の立場になったとき、指導のねらい、活動の流れ、予想される幼児の姿、教師の言動の意味・援助・配慮すべき点など援助・指導上の留意点を記述させ、指導法を考察させている[2]。

3．野菜・花栽培

野菜栽培は、次のとおりの実習を行う。1）露地栽培のための畝立て、肥料の種類、土作りを行う。土作りのポイントは、元肥を十分に施肥することである。緩効性肥料である有機質肥料（堆

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授
** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

(2016年5月9日　受付
2016年5月31日　受理)

肥、鶏糞)ならびに、速効性肥料である化成肥料を適切な量を入れ、備中鍬で十分に耕し、その後に畝を形成する。大学生は、ほとんど農作業は始めてであり、楽しみながら行っているが、重労働であることを自覚する。2）播種：表1の野菜の種子のうち、履修者が好きなものを選び、播種する。根菜、葉菜、果菜などを区別して栽培する。3）苗の定植:キュウリ、ナス、ピーマン、トマト、スイカなどは幼苗を定植する。本講義で用いる野菜のほとんどは、プランター栽培も可能であり、幼稚園や保育所での栽培に向いているものを選んでいる[3)]。4）栽培管理：水や肥料をやりすぎないことに注意する。栽培用の棚を立て、つるを誘引する。それぞれの野菜の特性を理解させた上で栽培を実践で行うことで、無駄な作業を省くこともでき、その後の病虫害対策を適切に行うことができる。

花の栽培については、神戸大学発達科学部玄関前の花壇の製作を想定して（図1）、一連の実習を行う。1）花種子の播種：光好性種子、嫌光性種子の違いとその播種法の違いを理解することが重要である。種蒔き用土として、水はけが良く、雑草の種子の混合の心配のないバーミキュライトを用いるのが適当である。2）定植：美しい花壇作りのためには、苗の状態で植えるのが肝要である。1ヵ月後くらいに、本葉が数枚展開した時点で、育苗土（例、花と野菜の土など園芸用土）：赤玉土：腐葉土＝2：1：1で組み合わせ、小型のビニールポットに定植する。3）花壇設計、校舎の花壇に適当な花の選定を行う。管理の方法、季節ごとの管理のなどの植物の特性を説明し、みずから調べる実習を通じて、環境整備のために適切な植物を選ぶことが可能となる。4）移植をおこなう。ポットで成長した健康な花苗を花壇に移植する。成長後の大きさを考えて、間隔を決める。

植物の選定としては、春季から夏季はマリーゴールド、ベゴニア、ペチュニア、トレニア、インパチュエンスなどが耐暑性、耐病性に優れている。また、雨の少ない冬季はハボタンなどが良いと考えられる。手入れが少なく、花持ちのよいものを選ぶのが良い。

表1　栽培に用いた植物

種　類	植　物
野　菜	コマツナ、ホウレンソウ、キャベツ、キュウリ
	カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン
	イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン
マメ・穀類	ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ
	ジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシ、イネ
果　樹	なつみかん、ハッサク、温州みかん、スダチ
	ユズ、キンカン、カキ（富有、サエフジ）、ブドウ
	（ピオーネ、デラウエア）、スモモ
	ナシ（長十郎、豊水）、イチジク
花　卉	ベゴニア、マリーゴールド、ペチュニア、サルビア
	キンセンカ、バーベナ、トレニア、デモルフォセカ
	マツバボタン、スベリヒユ、ヒマワリ、アサガオ
	ハボタン、チューリップ、ナデシコ、バラ



図1　発達科学部前の花壇

4．緑化設計と制作

壁面緑化のための指導をおこなっている。栽培管理の容易な1年生のヘチマ、アサガオ、ゴーヤを緑化用の植物として利用する方法について説明する[4)]。壁面緑化によりどの程度、クールダウンが可能になるかについて考察させる。また、緑化に選ぶ植物の特性として、ヘチマは、タワシや化粧水として、古くから生活に利用されてきたことを説明する。これらによって、地球温暖化対策としての緑化による環境保全、人間生活への利活用など自然の植物利用の多面性に注目させることができる。また、雌雄異花であるゴーヤは、花の形状やその特性、受粉の様式などの生物の基礎を理解させることもでき、緑化のための植物素材として適切である。

これらの実習は、不定期的に幼稚園児との交流もかねて行っている。その実践例としては、2011年11月9日チューリップ植付実習をおこなった。参加者は、神戸大学発達科学部生28名、神戸市灘区T幼稚園3歳児（年少クラス）66名である。幼稚園児と直接触れあい、実体験の中での相互作用への働きかけを通じて、園児どうしの関わりを実践させる。花の植付体験という体を動かし五感を発揮しながら行う実体験を幼児と共に行うことは、幼児の感情の変化も捉えることができ、教員として幼児にどのようにかかわっていけばよいのかを知るきっかけとなる[5)]。

5．田植え・稲刈り

田植え、稲刈りについても、来歴と日本文化との係わり合いを理解し、イネという植物を多方面から理解するように指導する。また、大学生たちは、幼児と言葉を交わし、泥田での幼児の補助、植え方をサポートするなどの実践も行った。また、稲刈りでは、鎌の使い方を指導しながら安全への配慮等についても実践的に学ぶことができた。

田植え：2015年6月2日　（図2）
参加者：神戸市灘区T幼稚園5歳児約70名
稲刈り：2015年10月15日
参加者：神戸市灘区T幼稚園5歳児約72名


図２　幼稚園児と大学生の田植えの様子

今後も地域の学校等の要請等も積極的に受け入れ、授業で利活用を図る予定である。

６．草あそび

幼年期にとっての「草あそび」とは、遊びという体験を通して、身近にある草花に興味を持つきっかけを作ることであり、この興味は、自然へのさらなる関心、学びへとつながる極めて重要な経験である。

本実習では、保育者養成を目的として大学生に対して以下の「草あそび」を実施した。

（１）「食べる」草あそび：ヨモギ餅を作る。

ヨモギ餅は、キク科の多年草であるヨモギ（*Artemisia princeps*）の葉を餅に練りこんだ餅菓子である。春から初夏にかけて採れるヨモギの柔らかい若葉を使い、風味豊かな伝統食として親しまれてきた。また、ヨモギは生活圏のどこにでも見られる植物で、止血、痛み止め、灸に使うもぐさなど、民間療法には欠かせない薬草としても有名である。

ヨモギ餅を作る過程は「ヨモギを探す」ことから始まる。幼児にとっては、探すという行為自体が遊びであり、視覚、嗅覚、触覚を使い、よく観察することで、植物の形態を認識していく。しかし、キク科のヨモギによく似た植物は多く、この時期は開花時期ではないため、ほぼ葉のみでの選別となる。厳密にいえば、ヨモギ餅に使用されるヨモギにも多数の種が存在し、「食べる」ということからも、幼児指導者は、植物の種を同定できる知識が不可欠である。しかし、ごく身近に存在するヨモギでさえ、大学生が実物を探すことはほとんどできなかったのが実状である。

実習では、最初にヨモギの利用法と形態的特徴を説明し、実習園での採取を行った。ヨモギ餅に適した若葉を選別しながら摘み取っていく。形態的特徴だけでは識別が不安な場合は、その葉を揉んで、ヨモギ特有の香りを確認する。また、ヨモギの葉の裏側には白く柔らかい毛が密集しているので、触るとフワフワとした感触がある。このように、ヨモギを見た目だけでない感覚を使いながら探していく。自らが採取した植物を使い、菓子として食べられることは、味覚としても植物を認識でき、特に幼児にとっては、楽しみながら植物に触れ合い、興味を持つことができると考えている。

吉田ら[6]は３歳から５歳児に対して自然環境での体験と子どもの活動について報告している。その中で、野の花摘みの体験に関して、３歳児では「摘む」、４歳児になれば、「探し、名前を知る」、さらに５歳児では「調べて観察する、押し花を作る」という活動を行うと述べている。４歳児ですでに植物の名前に興味を持つようになることから、幼児教育では、身近な植物の同定能力はもちろんのこと、食べ方や遊び方など、文化的知識も必要であるといえる。

（２）「作る」草あそび：ソラマメの人形を作る。

５月頃になると実習園内で栽培しているソラマメが収穫の時期を迎える。このソラマメを用いて、動く人形を作る実習を行った。ソラマメの鞘を人形の本体、マメの部分を手と見立てて、図３のような玩具を製作した。最近、食育が見直されており、食卓にあがる調理済みの食材がどのような環境でどのように育ち、実を結ぶのかを知らない子どもたちが増えている。本実習は、ソラマメの栽培、収穫、玩具作りを通して、幼児の植物への興味とともに、食としての関心を持たせる重要な経験である。そのため、幼児教育法では、自らが体験することで、幼児へのより良い実践と食育への理解が深まることが期待される。


図３　ソラマメの動く人形

（３）「参加する」草あそび：七夕飾り

日本の伝統文化には植物に関連するものが多くある。たとえば正月のしめ縄飾りや門松、春の七草粥、初夏の七夕祭りなど、季節や地域によって様々である。これらの習慣、行事に参加、触れることは、日本人としてのアイデンティティを感じることはもとより、社会的なコミュニティを形成させる。特に幼児期でのこのような経験は、植物文化への興味を持つとともに、地域への愛着を感じさせ、人との繋がりから豊かな感情を育む重要な教育であると考える。

本実習では、行事へ「参加する」草遊びとして７月初旬に七夕を行った。七夕には、七夕飾りが必要である。歌の歌詞には「笹の葉さらさら・・・」とあるが、実際に使用されているはササではなくマダケやモウソウチクがほとんどで、日本ではタケが成長する際にタケ皮（稈鞘）が剥がれ落ちるものをタケ、落ちずに残るものをササと呼んでいる。しかし、植物学的にはこのような区別はなく、すべてタケとして扱われる。また、竹は、タケ皮を包

み紙に用い、稈は細く割いて籠や笊の材料とするなど、生活用品としても身近な植物である[7]。ここでは、大学生に対して、七夕の意味だけではなく、使用する材料に関して植物学的、文化的説明を行い、七夕祭りをより理解させてから飾り作りに取り組んだ。

園内に植栽されているタケ類（*Pleioblastus sp.*）をノコギリで切り出だした後、それぞれ、色紙を用いて飾りを作り、短冊に願い事を記入した。これらを体裁よくタケに飾り付け、七夕飾りの完成である（図４）。作業は非常に簡単ではあるが、文化的、植物学的背景を理解したうえでこれらの行事に参加することは、適切で深い幼児教育に繋がるものと思われる。

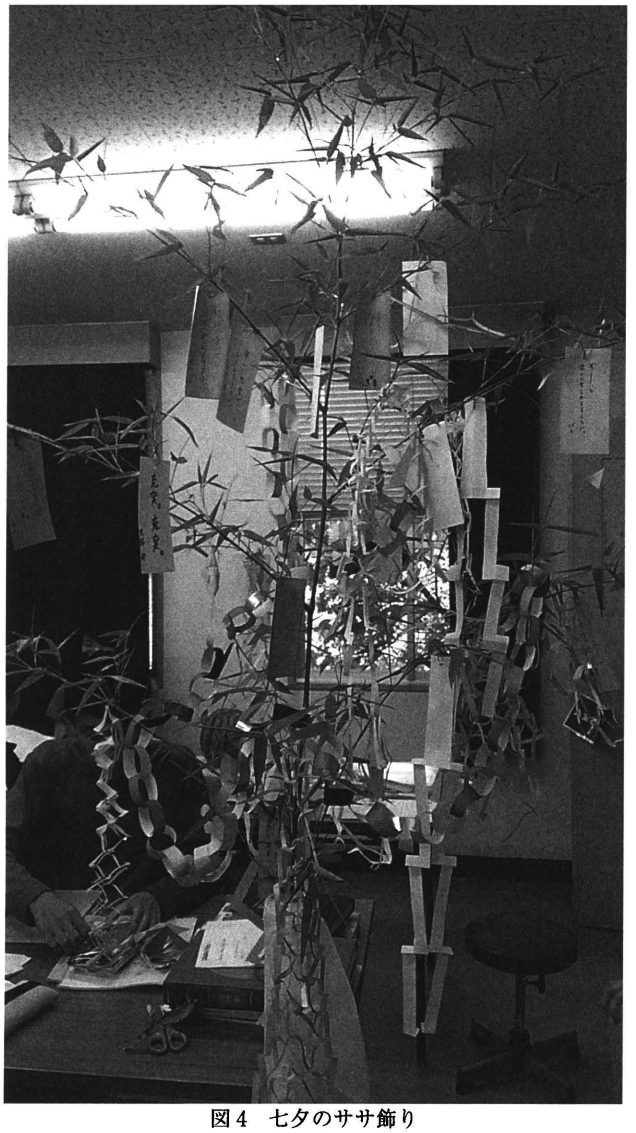


図４　七夕のササ飾り

７．総合的な体験型環境教育に関する提案

履修生には、以下のような課題を課した。１）作業日誌を執筆する。イラスト入り、写真入りの記述がふさわしい。２）各自が栽培した野菜、花の特性を調べる。３）「環境」指導案を作成する。これらの課題を通じて、教育要領のねらいに関して、大学生には次のような効果が期待できる。

自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付くという点では、実習観察園ならびに校舎の花壇や壁面の緑化環境を整備する実習を通じ、エコロジー感覚を幼児教育に取り入れることができる。また、ヨモギ餅の試作では、日本の古くから伝わる菓子と植物の密接な係わり合いがあることが理解でき、幼児の食育も期待でき、季節感のある遊びとなる。また、在来種であるタケの成り立ちから、七夕飾りを理解し、幼児に対して日本の四季の伝統文化の行事や食生活に関しての教育効果が期待できるようになる。

身近な環境において、発見を楽しみ、考え、生活に取入れようとするという点では、植物の成長を観察することを通じて、幼児の新たな自然の気づきに期待できる。身の回りの草花に、ことさら愛着を感じる情緒をもつようになると期待される。授業で栽培した野菜を用いて、履修生には積極的な調理を促している。幼児教育では、日常から食べている食物に対する興味がわき、それを生産する農業に対して、感謝する事が期待される。

履修生からは、次のような感想を得ている。「都会での生活では、小さいころはよく触れていた自然に触れる機会も減っているので、自分でわからないことは教えられない。授業の中で畑作業や身近な自然の利用について考える機会は貴重である。」、「この授業で、普通の授業では決して学ぶことのできないことが学べる。例えば、それぞれの植物についてなど、聞くだけでは分からない、五感を使うことでさらに経験として自分の中に残り、より大きな教育効果があると思う。何より、楽しい！！幼児の気持ちになれることも大きい。」「楽しみながら自然に親しみ、実習を行えるよい授業だと思う。保育園、幼稚園教諭になるにあたって、必要な力を知識ではなく実践、経験から得られるとてもよい機会になっている。」

今後もこのような五感をつかった体験型の環境教育法の実践を行っていく予定である。

引用文献

１）幼稚園教育要領　2009, 23pp, 文部科学省
２）柴崎正行・若月芳浩（編著），2009, 保育内容「環境」(最新保育講座), 168pp, ミネルヴァ書房
３）山田貴義 1992,　図解プランターの野菜つくり 140pp, 農山漁村文化協会
４）亀山章（編著），1989, 最先端の緑化技術, 360pp, ソフトサイエンス社
５）田宮緑 2011, 体験する・調べる・考える　領域「環境」, 207pp, 萌文書林
６）吉田若菜・宮本慶子, 2008, 北陸学院短期大学紀要 40, 173-196
７）山口裕文（編著），2013, 栽培植物の自然史Ⅱ - 東アジア原産有用植物と照葉樹林帯の民族文化, 386pp, 北海道大学出版会